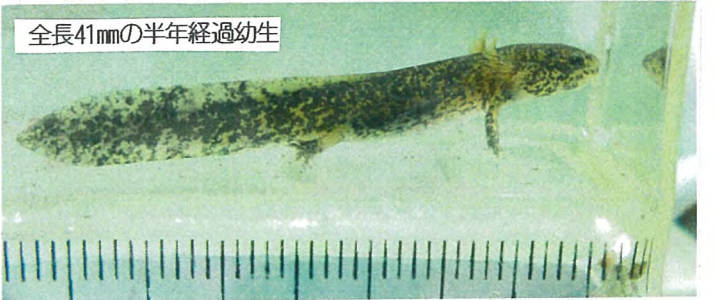


1970年代には、1971年完成の矢作ダムをはじめ、ダムや取水堰などの横断構造物により土砂の供給が断たれ、河床のアーマ化が歴然とし、砂浜や干潟が痩せ、水温の上昇や山林開発と荒廃による流量減少、鮎や鰻などの遡上や降下が阻害されるなど、水辺生態系の変化や攪乱が河川課題として取り上げられるようになった。

これらの河川課題は、以前、会報でも取り上げた故内藤連三氏が発起人となる矢作川沿岸水質保全対策協議会（略して矢水協）や、環境漁協宣言を発した矢作川漁協、豊田市矢作川研究所、矢作川天然アユ調査会、矢作川「川会議」、阿部夏丸氏が館長を務める矢作川水族館、矢森協などが牽引役となって日々智慧を絞り実践を積み重ねている。また、『流域は一つ、運命共同体』の立場・観点から国土交通省豊橋河川事務所を事務局とした矢作川流域圏懇談会が2010年に発足し、山・川・海の三部会に分かれて課題を議論し、現地視察や活動交流などを積み重ね、三年を経た今、課題解決の糸口を見つけられるかどうか注目を集めている。

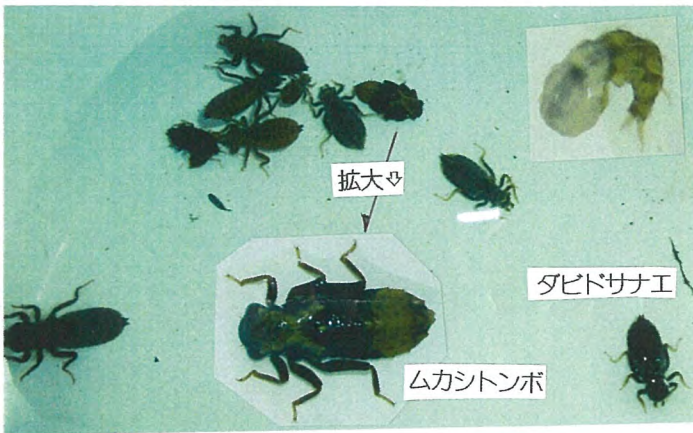
矢作川方式は全国に名を馳せ、水質汚濁防止や開発規制、市民主導の河川流域管理方法として評価が高い。

ハコネサンショウウオ

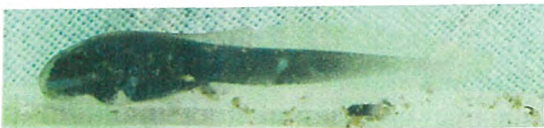


ハコネサンショウウオ Japanese clawed salamander

本州と四国の山地溪流に棲息する溪流性小型サンショウウオ。産卵は伏流水等水中で7-15個の卵が入った卵嚢を岩に付着させる。孵化した幼生は約3年水中で生活するためその年孵化した幼生から変態直前の全長80mmの幼生が同じ水域で見られる点はその他のサンショウウオとの相違点でもある。幼生期間を長くすることで繁殖開始年齢に達する期間を延ばすよう進化した種である。孵化後卵黄を消費した後はカワゲラやカゲロウ等の水生昆虫を採餌する。



写真：國村恵子・村松憲吉 2013年8月10日撮影



ナガレタゴガエルの幼生



採集したカワゲラ・トビケラ等

◆柳川の自然と水生生物

8月10日、矢作川流域圏懇談会の川部会で柳川に入った。平谷村の標高千ヶ岳地点に位置する勸沢には、矢作川水源の石碑があり、上流には砂防堰堤がある。

溪畔林はフサザクラやトチノキをはじめミヤマホウソウやサワグルミも混じる落葉樹が主で、春にはミヤマトサミズキやキブシが淡黄色の花を垂れ、夏にはエゴノキやカナウツギの純白の花、秋にはハウチワカエダやおオモミジの紅葉が美しく思うられた。他に、オノエヤナギ・クマシテ・サワシバ・オオバアサガラ・ミズキ・サイカチ・ウリノキ・アワフキ・コアシサイ・ノリウツギ・タマアジサイ・イワガラミ・ネムノキ・クサギ・リョウブ・マタタビ・サルナシ・ムシカリ・サワフタギなど樹種は豊富だ。

野草では、コアカソ・ヤブマオ・メヤブマオが目立ち、ウワバミソウ・マツカゼソウ・コオニユリ・ミヤマナルコユリ・オオバギボウシ・オトギリソウ・ハナウド・シラネセンキュウ・ハンショウツル・センニンソウ他多種類が日当たりのよい草地や岸辺に生育していた。

水生昆虫は内田臣一愛知工業大学教授がキカワゲラを主に採集した川虫の生態と溪畔林との関係性を含めて解説された。

カワガラスが時折潜水しては忽然と岩の上に現れ、いま流行のジェツジェツ!と鳴いて飛び、キセキレイも川から出る虫を採餌してはキチンキチンと鳴いて尾を振っていた。

淡水魚類は唯一、村松憲吉氏が全長8cmのアマゴを採集した。

両生類は珍しくナガレタゴガエルの幼生と溪流性のハコネサンショウウオの半年から3年未満の幼生3個体を採集した。

ハコネサンショウウオは完全遮光された岩の奥で湧水が絶えない場所に産卵する。繁殖は初夏や初冬に1~2回で雌雄共に黒爪が現れ水温変化により促される。餌は水生昆虫で約3年の幼生期間を水中で過ごし全長8cmで変態する。幼生も成体も暑夏や厳冬期は約10℃の湧水の奥で休眠する生態を有しサンショウウオ類ではほぼ水辺を離れない種であるため水質汚染は致命的な影響を及ぼす。

今回は現地で緻密な同定作業を行う時間がなかったためおおまかな採集記録のみ掲載した。

キカワゲラ・クラカワゲラ・フタメカワゲラ等5種類

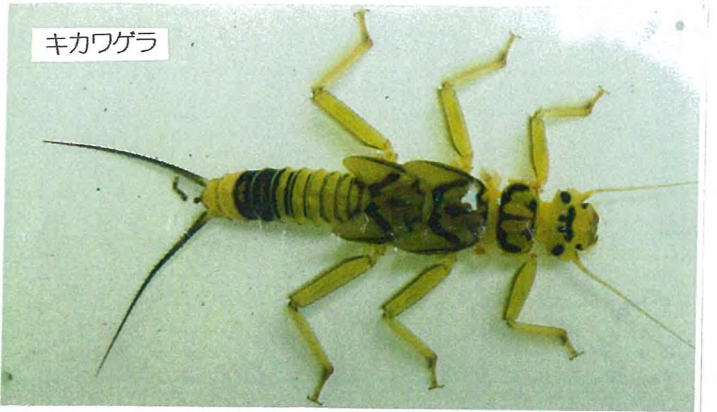
エルモンヒラタカゲロウ・マダラカゲロウ等6種類

ムナグロナガレトビケラ・ヒゲナガカワトビケラ等7種類

ヘビトンボ・プラナリア・サワガニ・ゲンゴロウの仲間

ムカシトンボ・ダビドサナエ・ヒメクロサナエのヤゴ

エゾゼミ・セセリとヒョウモンチョウ・サカハチチョウ等



観察風景



矢作川 是より流る 水的路 の石碑



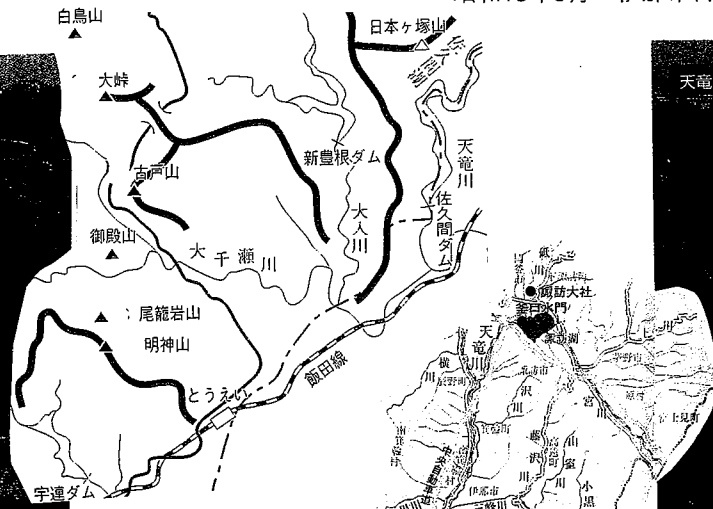
昭和初期 伊那市二条橋付近
川の東側に水車を張り、アユ、アカウオ、ウナギ等が捕れた



昭和13年8月 伊那市御園 天竜川で泳いで魚釣りをした帰り道

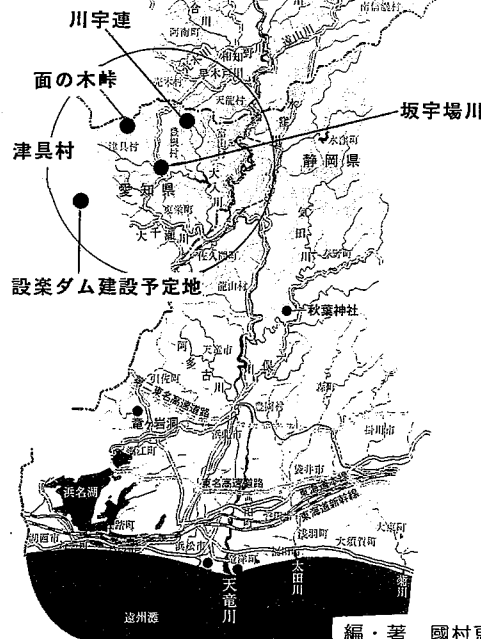


かつて暴れ天竜の名で
知られた天竜川も、今
では流量が減った……

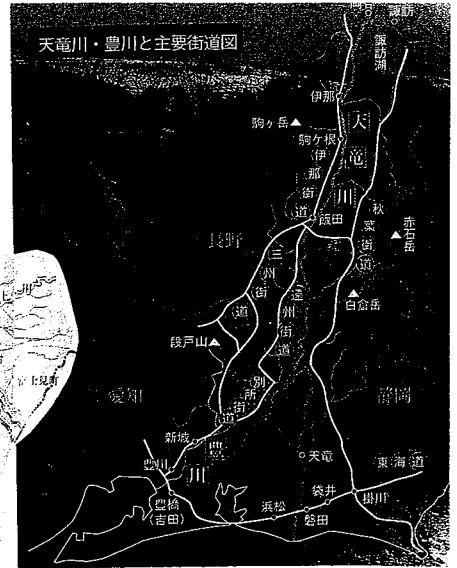


天竜川流域図

本書に収録した地域



編・著 國村恵子



木曾へ木曾へとつげだす米は
伊那や高遠の涙米

天竜下れば しづきにぬれる
持たせやりたや 櫓笠

と歌われた伊那節。涙米とはなんとも悲しい。以前、当会では諏訪湖、天竜川水源の山の高ボッチ・鉢伏山、辰野の源氏螢生息地、辰野の山々、駒ヶ岳、水窪ダムと山住神社や七年に一度現れる湖、白倉川、森町、小笠山、浜北森林公園、獅子ヶ鼻公園、油山寺・可睡斎、櫓ヶ谷沼と鶴ヶ池、尉ヶ峰、細江の山と奥浜名湖、都田川、中田島砂丘、太田川、天竜下りなど通算40回余の山行、河川視察、生物調査、他団体との交流を目的として天竜川流域を訪ねている。天竜川を代表する地形や文化は多数ある。上流域は赤石山脈と木曾山脈に挟まれた伊那谷で独特の地域文化を形成している。伊那谷は、飯田市をはじめ河岸段丘に成立する土地であるため、江戸時代には氾濫原でも新田開発のために築堤し、少しでも農地として耕作できるように工夫した跡が今でも残されている。中流域の愛知県側からは大木川が、静岡県側からは水窪川が合流し人工林一色の谷間を流れていく。この地域はかつて、天竜の洪水対策として金原明善が造林し、その後天竜美林として名を馳せた龍山村である。そして、天竜川が運んだ土砂によって形成された浜松から袋井までの広大な扇状地と台地の下流域。さらに遠州灘に注ぐ河口域には中田島砂丘があるが、今では多数のダム建設で流下土砂が激減し砂丘が半分にまで後退し、以前砂丘に大量に埋め立てられた産廃が露出し問題となっている。

天竜川は諏訪湖に流入する鉢伏山系等の河川を水源として流路延長をもとめれば230kmを超える。その鉢伏山麓にフランス式階段工である美しい牛伏川砂防工事がある。また、ザザムシ捕りで有名な川であり、独自の食文化も豊かで源から海まで物語はつきない。

本書では天竜川へ愛知県側から注ぐ最大支流の大川流域における自然を取り上げた。